

平等院 ガラス玉 正倉院

同一工房製「兄弟」か

正倉院宝物と酷似する
ガラス玉



宇治市の平等院は24日、鳳凰堂の阿弥陀如来坐像の台座から発見されたガラス玉の化学組成を調査したところ、一部が奈良時代の正倉院宝物と同じ工房で作られた可能性が高いと発表した。ガ

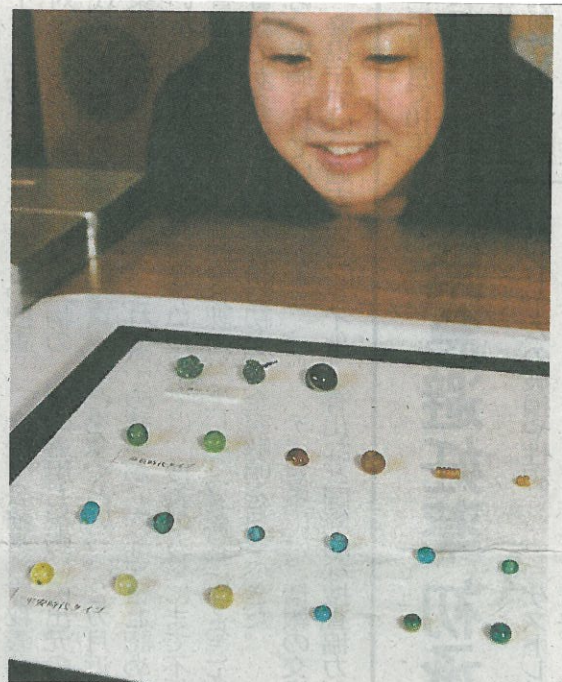
ラス玉は1053年の鳳凰堂創建時の装飾とみられ、平安時代製のガラス玉とともに、きらびやかに浄土を演出したと考えられるという。

ガラス玉は2004年の平成大修理の際、単体や装飾片などで透明感のある青や緑、黄色など約450個発見された。うち186個を東京理科大

藤原氏伝来 奉納の可能性

平安期のガラス玉についても井上会長は「ガラス工芸史の空白を埋める貴重な資料」としている。25日から境内のミュージアム鳳翔館で常設展示される。

(今口規子)



見つけた奈良時代や平安時代のガラス玉 (24日、宇治市・平等院) 撮影・木原貞男

会の井上暁子会長が考察した。

すべて中国で発明された鉛ガラスで、宋から平安時代に新技法として伝来したガラス玉が多数だったが、鉛やカリウムの組成が正倉院宝物と非常に近いガラス玉19個が見つかった。奈良時代のガラス玉のうち3個は、深緑に白のラインが入ったトンボ玉などで正倉院宝物に様式も酷似し、官立の同じ工房で製作された可能性が高いという。

京都市美術館の村井康彦館長は「正倉院に宝物を納めた藤原不比等の娘、光明皇后の遺品の可能性もある。藤原家代々の宝を鳳凰堂に納めた藤原頼通の思いの深さを感じる」と話している。